

○ ひとつ

いつもと変わらない夜だった。彼がお湯を沸かして淹れてくれた紅茶の湯気が、ふたつのマグカップから薄く立ち上っている。

彼が淫魔であるという事実には、何か特別な感情を抱くこともない。

いつから彼がこの家にいて、いつから当たり前のように隣で眠るようになったのか、いまとなつては記憶も曖昧だ。食事を摂り、同じベッドで身体を寄せ合い、共に朝を迎える。

出会ったのは駅前の通りだった。雨が降っていて、傘を持っていなくて、声をかけられた。それだけのことだ。

不思議なくらい、そこだけは鮮明に覚えている。差し出された傘の内側の匂いも、肩に触れた手の位置も。そのくせ、あれが何月だったのかは思い出せない。

人間と何ひとつ変わらない穏やかな日常を過ごす彼が、夜になれば私の身体から精気を喰らって生きている——それも私にとっては、とうの昔に受け入れた日常の一部に過ぎなかった。



一度だけ、私が高い熱を出したことがある。

夜中に目を覚ますと、彼が枕元に座っていた。濡らしたタオルと、水の入ったコップと、体温計。慌てた様子はどこにもなくて、いつから起きていたのかも分

からなかった。

朝になって熱が下がると、彼は短く息を吐いた。それから、少しだけ笑った。

「人間って、脆いね」

知っていることを確かめただけ、という言い方だった。

顔を洗いに行くと、洗面所に絞ったタオルが何枚も掛かっていた。



いま、湯気越しに彼の横顔を眺めている。

「……………なに？」

マグカップを両手で抱えていた彼が、不意に視線を上げてこちらを見た。

整った顔立ちに柔らかな笑みを浮かべ、首をかしげる姿はどこからどう見てもただの青年にしか見えない。

「ううん。なんでもない」

首を振って微笑み返すと、彼は少しだけ目を細め、静かに立ち上がった。音もなく私の隣へと移動し、その長い腕で背中から優しく抱きすくめてくる。

「嘘。僕の顔、じっと見てたでしょう」

耳元で囁く低い声と、首筋に寄せられる温かな唇。すり寄せてくる身体から伝わる体温はいつだって温かく、そしてどこか切ないほど優しい。

それだけで、腰の奥がぎゅっと切なく熱を帯び始めた。

彼の手指が薄い服の上から太ももの内側に触れた、ただそれだけで。内側が

キュツと収縮し、太ももの隙間を熱いものが伝い落ちていく。

「……もうこんなに熱くなってる。服の上からでもわかるよ。ここ、もう濡れてる」

耳朵を優しく食みながら、彼は甘い吐息とともに言葉を紡ぐ。

「……覚えててくれるの、嬉しいな。撫でただけで、こんなに」

彼の手が身につけた衣類を滑らかに手繰り寄せ、肌を露わにしていく。首筋から鎖骨、胸元へと滑り落ちる舌の熱さに、指の先から力が抜けていく。

「脚、こんなに開いて……僕の形に合わせて、中が勝手にひらいてる」

最奥へ、彼の熱く太いものが当てがわれる。けれど、そこで彼は動かなかった。

「……ん、」

待っているのだと、分かってしまう。この人は、私が迎えにいくまで動かない。息をひとつ吐いて、自分から腰を寄せた。

「いいよ。そのまま来て」

低い声が、耳のうしろで笑っている。蜜を掻き分け、すべらかに押し広げながら入ってくる。

「あっ……、ん……っ」

半分ほどまで来て、また止まった。

熱いのは触れているところだけで、そこから外れた腿の内側は、かえって冷たく感じる。

「……………っ、熱い……………」

「すごい締め付け……止まってるだけなのに、吸い付いてくる」

脚から力を抜くと、そのぶんだけ深くなった。

「……全部、入った。奥まで届いてる」

熱が内壁に密着したまま滑り抜けていき、行き止まりに届いた瞬間、お腹の底が、深く重く満たされた。

彼がゆっくりと退いていく。抜けきる手前で止まり、また同じ速さで戻ってきた。

息を合わせようとした。入ってくるのに合わせて吐いて、退いていくのに合わせて吸う。できているうちは、まだ自分の身体だった。

深いところに触れられても、声にはならない。唇を閉じて、鼻から息を抜く。

——そのうちの一度、吸うところを間違えた。

息が入りきらないまま奥まで来られて、喉の奥から声が出た。自分の声だと分かるのに、止め方が分からない。

「あ、っ……」

一度出てしまうと、次からは閉じておけなかった。合わせることを諦めた瞬間、彼の速さがそのまま身体に入ってくる。

内側が勝手に締まって、そのぶんだけ熱くなる。締めるつもりなんてないのに、止められない。

彼の腕に、指が食い込んだ。

抱え直された。膝の裏に手が入って、脚の角度が変わる。

さっきまで届いていなかったところに、先が触れた。

「……ここ、まだ知らなかったでしょう」

彼の言葉が鼓膜を揺らした。体内の深い場所へ、熱が注ぎ込まれていく。指先から爪先まで、小さな泡が弾けるような痺れが広がり、意識の端々が白く溶けていった。

やがて彼が最奥へ熱を吐き出し、長い吐息とともに身体が離れた——その直後だった。

いつもなら身体全体へと溶けて消えていくはずの熱気が、なぜか一箇所に留まり続けている。

腰の奥、届く限りのいちばん深いところで、熱が逃げ場を失って集まっていく。

引き抜かれたはずなのに、そこに何かが居座っていた。硬い。重い。奥にはまり込んで、押し広げたまま動かない。

「っ……あ、……ん」

「……どうしたの？ 苦しい？」

私の小さな声に反応して、彼がぴたりと動きを止めた。暗がりの中でもわかるほど、心配そうに眉をひそめて顔を覗き込んでくる。

「ううん、……大丈夫。ただ、ちょっと……奥が、重くて」

強がって笑ってみせたものの、違和感は消えない。それどころか、彼が身体を離れたあとも、その重みはいっそう主張を増していた。

「……おかしいな。どこか痛む？」

「痛くないよ。でも……何か、詰まってるみたい……」

横たわったまま、私は自分の下腹にそっと手を当てた。外からは何も分からな
い。奥にあるのに、そこがどうなっているのかは、私にも分からなかった。

確かめたくて、肘について身体を起こす。

そのときだった。

重いものが、内側を滑って下りた。

「あ……」

下りてくる。起こした拍子に、奥から。

「ふあっ、……なんで、これ、待って……っ！」

慌てて横になろうとしても、一度動きだしたものは止まらなかった。

止め方が分からなかった。とっさにお腹に力を込めると、かえって下の方がきつく閉じた。閉じたそこへ、上から重みだけが押しつけられる。

充分に潤ったそこを、滑らかな硬さを持ったものが、ぬめりを帯びて下りてくる。

経験したことのないほど満たされて、思わず吐息を漏らし、腰を強張らせた。しかし、押し出そうと内壁が絞り込まれ、塊に力が集まったその瞬間だった。

「んっ、あ……!!? なに、これ……っ」

締めつけられた表面から、抱え込まれていた熱が滲み出してきた。潰れたわけではない。押されたぶんだけ、内側のものが染み出してくるのだ。

密着したまま滑り降りてくる。深く満たされていくのと背中合わせに、内側か

ら全身へ広がっていく、重く甘い蜂蜜のような熱。出したいのに、力むこと自体が、塊を締めつけて、そのぶんだけ熱を溢れさせてしまう。

内側から溢れ出す熱に押し上げられて、喉が鳴った。背中が勝手に反る。

「な、なに……!？」

ただならぬ様子に青ざめた彼が、慌てて私の脚の間に滑り込んだ。

覗き込んだ彼の動きが、そこで止まった。

人間から精気を奪うだけの存在であり、人ならざるものであるはずの彼が。余裕を崩さなかった淫魔が、血の気を引かせて目を見開いている。

「……うそ、だろ……？　なんだよ、これ……」

彼の声が震えていた。見間違いではない。大丈夫だと言ってくれるはずの彼が、

明らかに取り乱していた。

それに内側を押し広げられながら、溢れ出す熱で頭の中がぼやけていく。その中で、私はその顔を見つめた。

（ああ……この人も、知らないんだ）

私の中に生み出された正体不明の何か。けれど、大好きな彼がここまで青ざめて動揺している姿を見たことで、不思議と心から恐怖が引いていった。

彼が私を傷つけるはずがない。彼が困惑しているなら、これは決して悪意から生まれたものじゃない。

「……あ、っ……は、んっ……!!」

最後の一押し。いちばん狭いところをすべらかに押し広げ、つるりと抜けて外

へ押し出された。

ぽとん、とシーツの上に落ちた音。

抜けた瞬間、押さえつけられていたものが一気に広がった。通り抜けるあいだじゅう漏れ続けていた熱が、締めつけから解かれて、全身へ散っていく。

「っ……あ、ああ……っ!!」

甘い痺れが背筋を突き抜けて、そのまま反り返った。指先だけが、小さく震えていた。

二人して息を呑み、ベッドの上を見つめた。

そこに転がっていたのは、半透明の淡い光を抱えた、丸く滑らかな珠だった。

「……はあ、っ……あ……」

呆然とベッドに突っ伏す私の横で、彼は固まったまま動けずにいた。

落した「それ」と、荒い息を吐く私の顔を何度も往復して見つめている。彼の手はかすかに震えており、その表情には、今まで見せたことのないものが浮かんでいた。

「……ごめん」

ぽつりと漏れたのは、かすれた声だった。

「僕のせいだ……こんなの、見たこともない。淫魔の体質なのか、僕が君から精気を奪いすぎたせいなのか……僕には、何も分からない」

そう言って、彼は絞り出すように顔を歪めた。

「理由が分かるまで、君にはもう触れない。二度とこんな思いはさせないから」

怯えたように自らの手を握りしめ、距離を置こうとする彼。

淫魔である彼が、人間である私に対してここまで狼狽し、傷つけることを恐れている。

息を整えながら、私はそつと手を伸ばした。彼の冷たくなった指先に自分の手を重ね、ゆっくりと首を振る。

「……それはやだ」

「……え？」

「触れないなんて、言わないで」

私の中に生まれたものが何なのかは分からない。けれど、出そうと力む最中から身体の芯まで届いたあの深くて重い熱は、あまりにも優しかった。

「あなたが分からないなら、たぶん悪いものじゃないよ」

まっすぐに見つめ返すと、彼は息を呑んだまま言葉を失った。

それから、ためらいがちにそれを拾い上げた。彼の手のひらに、ちょうど収まる。指を握り込めば隠れてしまうくらいの、小さなものだった。

真珠の膜を張ったような滑らかさ。

彼はしばらくそれを見つめていた。捨てるでも、置くでもなく、ただ持っていた。それから立ち上がって、ベッドサイドの引き出しを開ける。

かたん、と軽い音がして、光が見えなくなった。

夜の静寂の中、二人のあいだにはもう何も残っていない。けれど、あの引き出しの中に、それがひとつ入っている。

幕間

触れなかった。

四日、一度も。同じベッドで眠って、腕は畳んだままにした。彼女が寝返りを打つ気配がするたび、身体が勝手に動きかける。そのたびに止めた。

止められるうちは、まだいい。

あの夜、彼女の中から出てきたものを、僕は覚えている。手のひらに収まるくらい、小さなもの。真珠に似ていた。似ているだけで、何なのかは分からなかった。

分からないものを、僕は彼女の中に作った。



あの夜の翌朝、頭を下げに行った。

古い記録を持っている同族がいる。長く生きているというだけで、特別に偉いわけではない。ただ、僕よりは多くを知っている。

「人間に返した、って言った？」

そう訊き返された。

「返したんじゃない。返ってしまった」

同族は笑わなかった。笑われるほうが、まだましだった。

「君が？」

そこで初めて、顔を上げられた。

無理もない。僕は誰のことも覚えていない。何人いたのかも数えていないし、名前を訊いたこともなかった。夜のあいだだけ隣にいて、朝には忘れる。ずっとそうしてきたし、それで足りていた。

「誰の顔も覚えていられない、って言ってたのは君だろう」

「……そうだよ」

それ以上は言えなかった。

奥から出てきた記録は、思っていたより薄かった。

「好きに読んでいいよ。写しでよければ持っていけば」



写しを持ち帰って、四日かけて読んだ。

奪った話ばかりだった。どれだけ奪ったか、どこまで奪えるか、奪いすぎて壊した話。

返した話が、一行もない。

書かれていない。それだけのことだ。それだけのことが、こんなに怖いとは思わなかった。

書かれていないものには、前例がない。前例がないなら、これから何が起きるかも分からない。彼女の身体の中で。

記録を閉じた。

読み終えた足で、もう一度あの家を訪ねた。

「役に立った？」

「……何も書いてなかった」

「そう」

同族は、それ以上訊かなかった。訊かない代わりに、こう言った。

「その人間、見てみたいな」

僕は答えなかった。



帰り道で考えていたのは、記録のことではなかった。

彼女の声だ。あの夜、何もかも終わったあとに「触れないなんて、言わないで」と言った、あの声。

覚えている。声も、そのときの手の位置も、部屋の暗さも。忘れたことが一度もない。

忘れられない、という状態そのものが、僕には初めてだった。

分らないものを作ったのは僕で、それでも彼女は僕を怖がらなかった。

四日、待たせている。

なぜあんなったのかは、話せる。自分の身に起きたことだから、言葉にはできない。

けれど、この先どうなるのかを、僕は何ひとつ知らない。

それを黙ったまま、僕は彼女に触れることになる。

○○ ふたつ

あの夜から、四日が過ぎていた。

あれ以来、彼は約束通り私に指一本触れていない。同じベッドで眠りはするものの、いつも私を抱き寄せていた腕は静かに畳まれ、身体を触れ合わせないような一定の距離が保たれている。

精気を奪われない身体は軽いはずだった。けれど、軽くならなかった。

毎晩持っていかれていたぶんが、行き場をなくして下腹に溜まっている。そんな気がした。触れられない夜が重なるほど、そこが重くなる。

触れ合いたいのに触れ合えない切なさ、あの日体内を駆け巡ったあの途方も

ない熱への焦がれ。

「……ねえ」

深夜、背中を向けたまま静まり返る彼に、私はたまらず手を伸ばした。パジャマ越しに伝わる温もりに縋るように、指先でその背中を掴む。

「……だめだよ。触れたら、また君を苦しめるかもしれない」

振り返らないまま、彼が掠れた声で言った。必死で衝動を抑え込んでいるようなその声に、胸がぎゅっと締め付けられる。

「苦しくなんかない……お願い、理由なんてどうでもいいから。抱いてよ」

「……理由は、分かったんだ」

彼はゆっくりと身体を返し、暗闇の中で私を見つめた。その瞳が、深く揺れて

いた。

「ずっと調べてた。僕ら淫魔の古い記録を……」

言葉を区切り、彼は私の頬に手を伸ばしかけ、直前で思いとどまるように拳を握りしめた。

「本来、僕たちは人間から精気を奪うだけの存在だ。……だけど、僕は君を愛しすぎている。奪うだけじゃ満たされなくて、奪った精気以上の快感と力を、無意識に君の身体へ返そうとしていたんだ。……返さなくていいのに。君に返そうとしよう」

「返そうと……?」

「そう。でも、人間の身体は淫魔の力をそのままでは処理できない。精気は馴染

んでも、僕が返した純粹な力は体内の奥深くに残ってしまふ」

彼が一度言葉を詰まらせ、絞り出すように呟く。

「行き場を失った僕の力が凝固した塊……それが、あの珠だ」

言葉が部屋の静寂に溶けていく。

下腹にそつと手を当てる。あの日、内側を押し広げて出てきたあの重いもの。

あれは、彼が私を愛するがゆえに溢れ出した熱だったのだ。奪うだけの淫魔なら、決して生じないものだった。

「……僕が君を愛しているせいで、あんなものを作らせて、辛い思いをさせていた」

彼は自嘲気味に目を伏せた。

「愛し合うたびに、ひとつずつできる。……でも、人に返した話は、どこにも書いていなかった」

声が、少し掠れていた。

「僕のアが、君を苦しめている」

そこまで語り終えると、彼は深く息を吐き、静かに距離を取ろうとした。

「だから――」

「……じゃあ、あれはあなたの気持ちなの？」

私の声が、彼の言葉を遮った。

彼は目を見開き、言葉を詰まらせる。

「君を傷つけるものだと言ったんだよ？　出すのだって楽じゃないはずだ。僕が

君を愛さなければ、奪うだけの存在でいれば、君はあんな思いをしなくて済む」

「ううん」

私は自分から詰め寄り、彼の胸にしっかりと抱きついた。驚きで固まる彼の背中に腕をまわし、指先を強く食い込ませる。

「奪われるだけなんて嫌。……あなたが私を愛してくれて、返そうとしてくれた結果なら、私、いくらでも受け止められるよ」

理屈を知った今、あの夜の怖さは消えていた。身体の内奥が重くなるかもしれない。けれど、それが彼の愛の形なのだと分かった以上、拒む理由なんてどこにもなかった。

「抱いて。あなたの気持ち、ちゃんとちょうだい」

「……後悔するよ」

「しない」

理由は分かった。分かっただけだった。

これがどうなるのか、彼は一度も言わなかった。言わないのではなく、言えないのだと、そのとき気づいてしまった。

それでも私は、訊かなかった。

この人のことを、私は何も知らない。

雨の日のことなら言える。傘のことも、手のことも。けれど、その前後に自分が何をしていたのかが出てこない。思い出そうとするほど、周りだけが薄くなる。

……何年も前のことだから。

そう思うことにした。

諦めたように、彼が低く唸った。次の瞬間、強い力で身体が引き寄せられ、逃がさないように深く抱きしめられる。

重なり合った熱は、あの夜の戸惑いを含んだものとは違っていた。

額を合わせたまま、彼が短くくちづけてくる。触れるだけのキスなのに、それだけで身体の力が抜けた。

服を脱がせる手つきも、彼は急がなかった。膝を割って、確かめるように指で触れてくる。四日、待ち焦がれていたそこは、触れられただけで濡れた音を立てた。

「……四日も待たせたのに」

言いかけて、彼は続きを飲み込んだ。

それから、入り口へ彼の熱が滑り込み、最奥へと突き入れられる。ただ与えられる快楽を受け取るだけじゃない。内側を滑る熱とともに、お腹の底で新しい重みが形作られていく。私はそれを意識して噛み締めていた。

（……この重さが、あの人の気持ちなんだ）

「あっ……、ふぁ……っ♡」

「……すごい、……こんなにいっぱい締め付けて」

彼の短い吐息が耳元を打つ。最奥へ熱が吐き出された瞬間、奥に、重い密度が生まれる。彼が注ぎ込んでくれた愛の重み。奥に残ったそれを、そのまま抱えていたいと思った。

そして、彼が退いていく。

「あ……っ」

塞ぐものがなくなったそこから、重みが下に滑り落ちてくる。一度経験したからこそ、これから訪れることが分かっていた。

滑らかなものが入り口を押し広げて下りてくる。滑り合って、思わず腰が強張った。押し出そうと内側で締めつけた瞬間、表面から熱が滲み出した。

「んっ、あ……!!? ……っふ♡」

知っているはずの熱。けれど、自分の締めつけが呼び出すそれは、覚悟していたはずの意識をあっさりと吹き飛ばす。力めば力むほど、そのぶんだけ滲む。

押し出される重みと、弾ける熱が同時に押し寄せる。シーツを固く掴み、喉を

鳴らして喘ぐ。

けれど、そこで止まった。

いちばん狭いところに引っかかって、進まない。押し出そうとすれば、そこが閉じる。閉じたぶんだけ締めつけて、締めつけたぶんだけ熱が滲む。

「……っ、こんなに、漏れてる……」

彼の動揺を含んだ声が聞こえる。けれど、今の私には答える余裕すらない。

止まっているのが、いちばんつらかった。滲み続ける熱に溶かされて、このまま何も考えられなくなる前に終わらせたい。

息を詰めて、下腹に力を集める。

（――出て）

最後の一押し。つるりと重さだけを残して、それが抜け落ちた。

ぽとん、と軽い音。

「ん、あ……っ、あ……っ♡」

「……うん。ちゃんと、受け取ってくれてる」

知っていたはずなのに、備えていたぶんだけ深く持っていかれた。解けた熱が回りきるまで、声も呼吸も戻ってこない。

出せた、と思った。

苦しくても、最後に力を込めれば押し切れる。そういうものなのだと、このとき覚えてしまった。

シーツの上に、ほのかに光る珠が転がっている。

荒い息を吐きながら彼を見上げると、彼は痛々しいほど優しい眼差しで私を見つめていた。そつと伸ばされた彼の手が、私の頬の汗を優しく拭う。

「……本当に、これでよかったの？」

「うん……だってこれ、あなたの愛でしょう？」

私は微かに微笑み、彼の手のひらに頬を寄せる。

彼はそれを拾い上げて、あの引き出しを開けた。

かたん、と軽い音。中で、小さくぶつかる音がした。

ふたつになった。

〇〇〇〇　いくつも

「——来客の予定、明日の昼だったよね？」

リビングで片付けをしていた彼が、台所で雑巾を絞っていた私の背中に声をかける。

「うん。だからダイニングとお客様用のスリッパ、今夜のうちに拭いておかないと」

エプロンの紐を結び直し、努めて平然と返事をした。

流しの縁に手をついたまま、少しだけ息を整える。

三つ。

愛し合うたびにひとつずつ作られるそれが、いま、私の中にある。奥にしまわれているわけではなかった。私の奥は、そんなに深くない。彼を受け入れているあいだけ、そこは私の知らない広さに変わるけれど、いまはただ、行き場をなくしたものが重なっているだけだ。

はじめは、少し動けば勝手に落ちていった。けれど、そうならない夜があった。力さえ入れなければ、そのまま奥にいてくれるのだと、そのとき知った。

知ってしまったえば、簡単だった。

次の夜、彼が退いたあと、私は力を入れなかった。入れれば出る。出れば、またあの時間が始まる。分かっている、入れなかった。

抱えているほうがいい。そう決めたのは、たしかにあのときだった。誰にも言

わなかつたし、彼にも言っていない。

次も、その次も、そのままにした。

どれくらい保っていられるのかは、彼も言わなかった。

横になっているあいだは、動かない。起きて歩けば、そのぶんだけ下がる。

いちばん下のひとつが、いちばん狭いところのすぐ手前まで下りてきてしまつた。

よりによつて、いちばんよく分かる場所に。

歩くと、それがわずかに揺れる。踵が床を打つ拍子に、ずり、と重みが下がる。

慌てて奥に意識を集めて引き上げるけれど、力を込めるとかえって下がった。腹に力を入れるのは逆なのだ、この数日で覚えた。

正しいのは、力を抜くこと。抜いて、内側だけをそつと引き上げること。

そんな器用なことを、掃除をしながら続けていられるはずがなかった。

来客用のスリッパを並べようと、膝を折って深くかがみ込む。

「……っ」

途端に、ずしりと一段、下りてきた。

とっさに床に膝をつき、太腿を強く閉じ合わせる。閉じた内腿の力がそのまま伝わって、入り口がきつく締まった。すんでのところで、止まる。

止まったまま、そこにある。

濡れた雑巾を握りしめて、私は動けなかった。明日の昼、ここに人が座る。この床に、スリッパを揃えて、お茶を出して。そのとき私はきつと平気な顔をして、

いま自分が膝をついているこの場所を、覚えている。

背中が熱くなった。

耐えていれば、そのうち楽になるものだと思っていた。けれど違った。時間が経つほど下がってくる。出すこと以外で楽になる方法は、たったひとつしかない。奥が広がればいい。三つとも、上へ逃げてくれる。

(……でも、そこが広がるのって)

考えかけて、やめた。

「……掃除、手伝おうか？」

後ろから差し伸べられた腕が、私の身体を優しく抱き寄せた。彼の手が服の上からそつと下腹へと滑り落ち、そこを愛おしそうに撫でる。